

自己評価報告書(最終報告)

報告者

生活・健康系コース
(保健体育)／松井 敦典

■平成24年度の目標に対する自己点検・評価

I. 学長の定める重点目標

I-1. 科研費申請に向けた計画等

国立大学法人運営費交付金は年々削減され、教員の研究費配分も厳しくなっており、教員各自が研究のための外部資金を獲得しなければならない状況である。そこで、科研費申請に向けて、あなたが考えているテーマと計画等について示してほしい。

1. 目標・計画

主たる研究テーマとして、基礎的水泳教育に関する研究を中心に取り組んでいる。本年度科研費(基盤研究B)に申請している「日本の水泳教育再考 水上安全を基礎とする人間力の開発への転換」を4研究機関5名の研究者によるチームを編成し、プロジェクトを進行させている。新指導要領が完全実施されるなかで、水泳教材を適切に取り扱い、効果的な教育へと導くための研究であり、採択の可否に関わらず研究計画およびその実施は進行中である。尚、日本教育大学協会研究助成にも同内容を申請している。

2. 点検・評価

科研費および日本教育大学協会研究助成の獲得は叶わなかったが、それら予算を要しない範囲の研究を進め、次年度以降の外部予算獲得を目指した。2012年5月にISHOF(International Swimming Hall of Fame, Fort Lauderdale, USA)で開催されたIAHSFF(International Aquatic History Symposium & Film Festival)に参加発表し、水泳教育の歴史を振り返り、今後の望ましい方向性を見定める動きは世界的な動向であることを理解した。今後も引き続き、教育制度の中で水泳を如何に取り扱い、子どもたちに何をどのように教えていくべきなのか、あるべき姿を追求していきたい。

I-2. 大学院学生定員の充足に向けた取り組み

専攻・コースのこれまでの大学院学生定員の充足状況を踏まえた上で、あなたは定員充足のためにどのような取り組みを行うか、具体的に示してほしい。

1. 目標・計画

私の専門とする座学「バイオメカニクス」と実技「水泳」を中心に、各大学・スポーツ競技団体・行政関係部署・関係機関等の知人を通して大学院の学生募集を広報している。いままで、バイオメカニクス・スポーツ科学による競技支援や、競技種目としての水泳(競泳・水球・水中運動)を研究する目的の受験生・入学生を迎え入れて来た。これからも、さらに新たな関係先を開拓しつつ、教育現場・スポーツ現場等で活躍するための人材確保に努めてきたい。

2. 点検・評価

地域学校、教育委員会や体育協会、各スポーツ競技団体等の外部組織との関連業務やそれを契機とした交流を通して、鳴門教育大学の教育・研究機能と社会の連携を深めている。特に本年より鳴門渦潮高等学校との連携から、高等学校現職教諭らとの接触の機会も多くなり、それを通じた大学院勧誘も行った。また、例年通り、各種学会やスポーツ競技会(競泳、水球、等)の折に、大学院勧誘を続けている。しかし、本年度はそれらの成果として実際の受験者の増加に結びついてはいない。多少の年度変動は致し方ないとしても、今後も継続的に取り組んで行く必要がある。

II. 分野別

II-1. 教育・学生生活支援

1. 目標・計画

体育科・保健体育科の教科専門を指導する立場から、教員として必要な教科の力を確実に身につけるよう指導方法を精査する。そのなかで学生が本学の持つ教育資源を活用できるよう、学生の環境整備・構築を促し、それを有効利用できるよう指導する。学生の活動エリアにおけるIT環境、学生の情報リテラシー、研究室や教育コースとしての支援体制等に留意しながら、学生に教員としての力が涵養できるよう、支援する。

2. 点検・評価

授業やゼミ活動等、大学生生活全体を通して、所属する学生らとの接触する機会それぞれについて、学生の教員としての資質向上につなげられるよう意識しながら接した。しかし、それに対する学生らの反応及びその後の学習態度については物足りない面もあり、その傾向が年々悪化しているように感じられることが気がかりである。これが、単に学ぶ側の質の低下と諦めることがないよう、教員側の問題や組織サービスの問題の所在も含めて、総合的に対応していく必要がある。

II-2. 研究

1. 目標・計画

科研費申請(基盤研究B)している「日本の水泳教育再考 水上安全を基礎とする人間力の開発への転換」の計画を中心に、新指導要領における水泳の適切な取り扱いの方法の確立を目指す。その一環として、5月9日～12日に米国フォートローダーデールにて開催される国際シンポジウムInternational Aquatic History Symposium & Film Festival (International Swimming Hall of Fame主催)にて「The History and Problem of the Swimming Education in Japan」を発表し、同記念誌に投稿する。共同研究「Can Swim? Project」をすすめ、国際的な見地ものにと水泳の意義や価値を再検討し、学校教育や社会教育に活かす授業内容や教材づくりをすすめる。
溺水予防・災害対策としての水泳教育は、本学がすすめる予防教育の概念とも一部重なるので、それに関する実践例も模索していきたい。
従来から取り組んできた、日本スポーツ科学センターや徳島県体育協会との連携をさらに押し進め、競技スポーツの技術分析の方法とその実践例を増やし、競技力向上のための支援方法として確立させる。

2. 点検・評価

科研費および日本教育大学協会研究助成の獲得は叶わなかったが、5月9日～12日にISHOF(International Swimming Hall of Fame, Fort Lauderdale, USA)で開催された国際シンポジウムInternational Aquatic History Symposium & Film Festival (International Swimming Hall of Fame主催)にて「The History and Problem of Swimming Education in Japan」を発表し、感謝状を受賞した。記念誌に投稿し、掲載論文として受理された。(The History and Problem of Swimming Education in Japan, Atsunori MATSUI, Toshiaki GOYA, Hiroyasu SATAKE, The IAHSFF Book, 129-135, 2012.)
他の業績として、共同発表『小学校3年生における「浮く・泳ぐ」運動の実践報告 ～命を守るためのサバイバル水泳術～』(日本水泳・水中運動学会2012年次大会)、共同研究「水泳未熟練者のスキル獲得過程 ～200m個人メドレー完泳を事例として～」(鳴門教育大学学校教育研究紀要、27,13-22,2013.)

Ⅱ-3. 大学運営

1. 目標・計画

保健体育コースの教官定員の削減に対応するため、少人数でも機能できるコース運営システム作りのために協力する。従来から行って来た授業や講座業務のICT化をさらに押し進め、事務手続等の簡素化とコースの情報発信に貢献する。各種委員等、与えられた任務及び責務を全うする。プール、艇庫周辺、トレーニング室を中心に、体育施設の保守・点検に協力する。学生生活支援チーム等事務組織と連携しながら、授業や課外活動等が円滑に行われる環境整備に留意する。

2. 点検・評価

学校教育研究科教務委員会、国際交流委員会の委員として、コースから選出された立場でそれぞれの職務を行った。また、学校教育研究科入試委員の代理としてパンフレット制作や説明会担当等を行っている。体育施設に関しては主にプール周り(水質保持、環境整備)、艇庫周りを中心にその維持管理に務めている。特に本年度は鳴門渦潮高等学校との高大連携の一環として、本学の業務として水辺活動の授業を本学プール及び艇庫周辺で実施した。学外者の利用が円滑に行えるよう、環境整備に努力した。さらに同高校の体育科授業「スポーツ演習」の授業計画や授業内容について、担当教員と検討するとともに一部分担について計画を作成している。

Ⅱ-4. 附属学校・社会との連携、国際交流等

1. 目標・計画

附属学校における教育支援(授業補助、LFT担当等)、教育アドバイザー、徳島市学校体育活性化校内研修助成事業、徳島県文化スポーツ立県局県民スポーツ課、徳島県教育委員会体育健康課、徳島県体育協会(スポーツ医科学委員会、競技力向上委員会、および各種セミナー)、徳島県水泳連盟等、関係する各組織と連携し、社会貢献できる各種行事に積極的に参加する。またそのことにより、鳴門教育大学をアピールする。その際に本学大学院の紹介を実施し、受験生の確保と入学者の増員を図る。

2. 点検・評価

徳島県小学校体育授業はつらつサポート[徳島県教育委員会 学校体育安全課]として3校、教育支援講師・アドバイザー派遣事業[本学]として5校、その他教育講師等3件、講演会・実技講習会3件、の連携活動を実施した。また、徳島育ち競技力向上プロジェクト推進委員[徳島県文化スポーツ立県局県民スポーツ課]、競技力向上スポーツ指定校ステップアップ事業指定校選考委員(委員長)・競技力向上スポーツ指定校ステップアップ事業指定校評価委員[徳島県教育委員会体育学校安全課]、スポーツ科学委員・競技力向上委員[徳島県体育協会]として、各種委員会および関連行事に携わっている。さらに徳島県選手団本部役員(総務)として「第67回国民体育大会 ぎふ清流国体」に参加した。日本水泳連盟水球審判審査員として5つの大会でデレゲート及び審判審査を担当した。徳島県水泳連盟常務理事・医科学委員長として、競技団体の活動に貢献した。徳島ライフセービングクラブの設立委員として、会の設立に貢献した。徳島県立鳴門渦潮高等学校との高大連携事業推進委員として連携会議に出席し、連携方法の立案に関与するとともに本学にて連携授業を実施した。第12回学校水泳研究会を開催し、水泳教材に関する教育関係者等への啓蒙に貢献した。

Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)

学校水泳や安全水泳に関する情報発信地およびそれらの学習や研究の拠点として、ホームページ(<http://spbio.naruto-u.ac.jp/matsui/> , <http://www.naruto-u.ac.jp/~matsui/sss/ssstop.html>)や各種学会・研究会・イベント等を通じてアピールしている。また本年度参加した国際水泳殿堂(FLUSA)における国際水泳史シンポジウムに参加発表し、論文をが受理掲載されたことにより、国際的にも水泳教育の拠点として認知されたと自負している。徳島県小学校体育連盟等からの依頼もあり、水泳授業に関する研究についての連携をすすめている。徳島県・徳島県体育協会らとのスポーツ行政やスポーツ科学を通じた関係などから、鳴門渦潮高校との高大連携に関する基盤づくりから授業等の実施計画および授業担当にも関わっている。さらに、徳島県教育委員会の競技力向上スポーツ指定校の選考委員長およびその評価委員を務め、徳島県内のスポーツ競技力向上と組織運営に貢献している。これら全体を通じて、社会全般の体育・スポーツ活動における鳴門教育大学の貢献をアピールしている。